

大学卒業生の母校の運動部応援に関する経験と意識 —1970年から2014年に国内の大学を卒業した 1,800人に対する全国調査より—

Graduates' Experiences of and Consciousness
regarding Supporting the Athletic Clubs of Their Alma Maters

小林勝法¹, 北徹朗²
Katsunori Kobayashi, Tetsuro Kita

Abstract

The promotion of university sports needs the support of the graduate. The purpose of this study is to clarify university graduates' experiences of and consciousness regarding supporting university sports. Accordingly, a questionnaire survey was conducted targeting the people who had graduated from a university or a junior college from 1970 through 2014, and 900 men and 900 women responded. The survey results are as follows: 1) Among the respondents, 32.4% of men and 21.8% of women replied that they could sing the school song and rooters' song of their alma maters. 2) Further, 30.9% of men and 17.2% of women reported having supported the athletic clubs of their alma maters. 3) Approximately 50.6% of men and 32.4% of women expected the achievements of the athletic clubs of their alma maters. 4) For the three aforementioned questions, more men than women responded. In addition, the number of graduates who participated in extracurricular activities was more than that of the graduates who did not participate. Hence, the study suggests that graduates' gender and experience in extracurricular activities influence their support of and expectations regarding the athletic clubs of their alma maters.

キーワード：大学スポーツ、応援歌、課外活動

1. はじめに

大学スポーツは運動部学生の自己実現だけでなく、大学のブランディングとコミュニティ形成の面でも重要である。米国では収容人員が10万人を超える巨大スタジアムを有する大学が複数あり、学生や卒業生、地域住民が多数観戦し応援している。日本でも戦前は大学野球が人気を博しており、1906年の早慶戦には10万

人の観客が集った（読売新聞，1906）。最近ではラグビーワールドカップ2019日本大会の人気の余波もあって、2020年1月11日に新国立競技場で行われたラグビーの全国大学選手権は5万7千人を超える観客を集めた（読売新聞，2020）。また、テレビ観戦では、関東学生陸上競技連盟主催の箱根駅伝が毎年、30%近くの高視聴率を上げており、年間視聴率のトップ

¹ 文教大学国際学部

² 武蔵野美術大学

10 入りをすることもある。

大学スポーツを一層振興するためには、運動部学生への支援だけでなく、大学スポーツの応援文化を醸成することが重要である。そうすれば、卒業生と地域住民も含めた大学コミュニティを活性化し、地域振興にも寄与できるであろう。大学スポーツを応援する人を増やし、観戦料や寄付金などで収益を挙げれば、運動部への支援や試合のプロモーション、観戦者へのサービスができる。

スポーツ観戦に関する社会学的な研究は多いが、大学を対象として、応援という観点からの研究成果は多くない。スポーツ庁の「スポーツの実施状況に関する世論調査」によれば、学生が観戦する理由として、「応援しているチームがあるから」(25.7%)と「応援している選手がいるから」(21.3%)が上位3番目と4番目に上がっている(スポーツ庁, 2020)。松山大学の学生課職員の一柳は、四国インカレ応援バスツアーを企画・実施し、応援者と選手の双方の帰属意識を高揚したと報告している(一柳, 2015)。また、全国大学体育連合が2017年に行った全国調査(約6,000人回答)では、所属大学の運動部の試合を観戦したことがある一般学生は男性が21.2%、女性が17.3%で、観戦を希望する割合は男性が47.0%、女性が53.9%であった(全国大学体育連合, 2018)。これらは現役学生を対象とした研究であり、卒業生を対象とした研究は見当たらない。

大学教育が学生に、知識・技術の獲得や態度変容などの面でどのような影響を与えているかに関する研究はカレッジ・インパクト研究と称され、米国では長年の蓄積がある(江原, 2011)。おもな研究手法は卒業生に在学中の教育を評価させるアンケート調査であり、日本の大学でも数多く行われてきた。その多くは、卒業生の進路動向や就業実態、キャリア形成、大学教育の内容を評価することを目的として行っており、スポーツ応援に関する先行研究は見当たらない(小林, 2015)。

そこで、大学卒業生に在学中と卒業後の母校のスポーツ応援経験を振り返ってもらい、年代・性別による特徴や在学中のスポーツ経験との関係について、全体的な状況を把握することを目的としてアンケート調査を行った。

2. 目的と方法

2.1 目的

本研究の目的は、大学あるいは短期大学(以下、大学・短大と記す)の卒業生に母校の運動部の応援経験を振り返ってもらい、その応援経験や校歌・応援歌、母校運動部の活躍に対する意識を調査し、定量的な分析により、卒業年代や性別、学生時代の課外活動経験による特徴を明らかにし、その要因についての示唆を得ることである。

2.2 アンケート調査の概要

調査対象は、大学・短大を1970年から2014年に卒業した人とし、居住地は全国とした。卒業した大学・短大は限定せず、校名の回答も求めなかった。卒業年の5年刻み毎にグループ化し、各群とも男女100人ずつ、合計1,800人から回答を得られるようにした。

調査内容は、個人の属性(年齢や性別、居住地、大学卒業年)のほか、運動部の応援や課外活動の経験、校歌・応援歌、運動部の活躍への意識についてであった。

調査は、インターネット調査を専門とする業者に委託し、2018年11月12日から15日の期間に実施した。委託した調査会社は、(一財)日本情報経済社会推進協会よりプライバシーマーク使用を許諾された事業者であり、個人情報取り扱いは適正に行われていると判断した。また、調査会社から提供を受けたローデータには個人を特定できる情報は含まれていない。なお、筆者らが所属する大学においては、重要な個人情報を収集せず、個人の匿名性が確保できるアンケート調査については、研究倫理委員会の審査を受ける必要はないことになって

おり、それに則って調査を実施した。

3) 統計処理および分析方法

集計結果は、性別および卒業年代別に集計し、比較検討の際には必要に応じて、 χ^2 検定（有意水準1%）を行った。

3. 結果

3.1 回答者の属性

回答者の属性を表1に示す。卒業した学校種は、男性の97.3%が大学で、短大が2.8%であった。女性は、58.4%が大学で、41.6%が短大であった。卒業年代グループ毎に見ると、1970年卒から1994年卒まではおおそ短大卒の方が多いが、1995年卒からは逆転し、短大卒が少なくなり、2005年卒以降は12.0%と急減している。短大卒の減少は、1990年代以降に短大の改組が進んだことと符合する。短大数と学生数は、1990年には593校、約45万人であったが、2014年には352校、約13万人となっている（文

部科学省，2020）。

回答者の年齢は24歳から76歳、平均は48.8歳であった。卒業年代グループ毎の平均年齢や標準偏差は表1に示す通りである。ほとんどのグループで平均値と中央値がほぼ一致しており、その差の絶対値は男性で0.04～2.45歳、女性で0.08～1.77歳である。標準偏差は、男性で1.87～8.60、女性で1.79～5.22であった。これらの数値が大きいのは、男女ともに2005年卒以降である。自由記述回答で確認すると放送大学や通信制大学の卒業生も含まれていた。これらの年代の年齢分布は比較的ゆがみが認められるものの、全体としてはゆがみが少なく、回答者に偏りはないと判断できる。

居住地は全都道府県に広がっていた。人数が多いのは、一都三県が42.9%（男性42.1%、女性43.8%）で、次いで、京都・大阪・兵庫の15.8%（男性15.0%、女性16.6%）であった。

表1 回答者の属性

	人数	卒業した学校種		年齢(歳)				
		計	短大	大学	平均	標準偏差	最小値	最大値
男性								
1970～1974年卒	100	1	99	69.0	1.87	64	74	69
1975～1979年卒	100	1	99	63.8	2.68	59	75	63
1980～1984年卒	100	2	98	58.8	2.40	54	71	59
1985～1989年卒	100	6	94	53.9	2.26	49	65	54
1990～1994年卒	100	3	97	49.5	3.15	44	72	49
1995～1999年卒	100	6	94	45.8	4.97	40	71	45
2000～2004年卒	100	1	99	39.9	3.67	35	65	39
2005～2009年卒	100	1	99	35.5	6.13	29	74	34
2010～2014年卒	100	3	97	32.0	8.60	25	76	29.5
全体	900	24	876	49.8	12.82	25	76	50
女性								
1970～1974年卒	100	60	40	66.9	2.04	64	73	67
1975～1979年卒	100	51	49	61.8	1.79	59	67	62
1980～1984年卒	100	62	38	56.9	2.04	54	63	57
1985～1989年卒	100	48	52	52.8	2.46	49	60	53
1990～1994年卒	100	51	49	47.3	2.19	44	58	47
1995～1999年卒	100	43	57	43.5	2.76	39	56	43
2000～2004年卒	100	35	65	38.2	2.39	34	47	38
2005～2009年卒	100	12	88	33.9	3.22	29	50	33
2010～2014年卒	100	12	88	29.8	5.22	24	69	28
全体	900	374	526	47.9	12.36	24	73	48

3. 2 出身大学・短大の校歌や応援歌の歌唱

出身大学・短大の校歌や応援歌について歌えるかどうかを尋ねた結果、男性では、「歌える」が19.2%、「歌える人と一緒なら歌える」が13.2%、「応援歌や校歌はあるが歌えない」が34.1%、「応援歌や校歌はない」が4.7%、「応援歌や校歌があるか知らない」が28.8%であった。「歌える」「歌えない」「あるかどうか知らない」に大別するとほぼ1/3ずつであった。卒業年別の結果を図1に示す。1970年卒～1989年卒の昭和期卒群と1990年卒～2014年卒の平成期卒群で比較すると、昭和期卒群の方が「歌える」比率が高く、有意差 ($p<.001$) が認められた(表2)。

出身大学(短大)の校歌や応援歌についての女性の結果は、「歌える」が10.2%、「歌える人と一緒なら歌える」が11.6%、「応援歌や校歌はあるが歌えない」が33.9%、「応援歌や校歌はない」が8.1%、「応援歌や校歌があるか知らない」が36.2%であった。大別すると「歌える」が約2割で「歌えない」が約3割、「あるかどうか知らない」が約4割であった。性別で比較すると、男性の方が「歌える」比率が高く、有意差 ($p<.001$) が認められた(表2)。校歌・応援歌については女性の方が関心も低く、歌唱できないという結果であった。卒業年別の結果を図1に示す。1970年卒～1989年卒の昭和期卒群と1990年卒～2014年卒の平成期卒群で

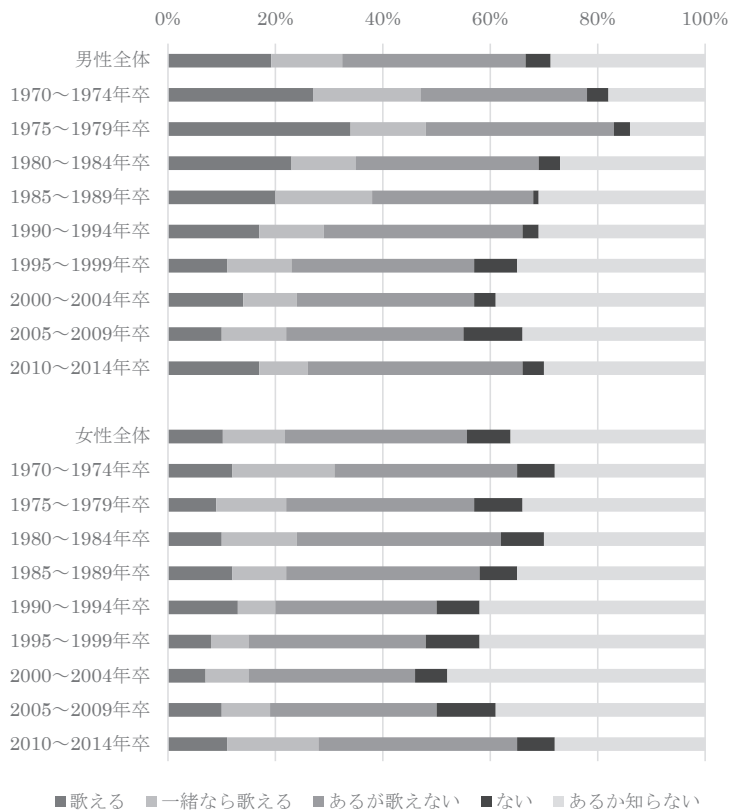


図1 校歌・応援歌の歌唱

表2 校歌・応援歌の歌唱

	人数	歌える	歌えない	知らない	χ^2 乗値	p値
男性	858	34.0%	35.8%	30.2%	26.00	0.000
女性	827	23.7%	36.9%	39.4%		
男性 昭和期 ('70~'89年卒)	388	43.3%	33.5%	23.2%	30.36	0.000
平成期 ('90~'14年卒)	470	26.4%	37.7%	36.0%		
女性 昭和期 ('70~'89年卒)	369	26.8%	38.8%	34.4%	7.62	0.022
平成期 ('90~'14年卒)	458	21.2%	35.4%	43.4%		
男性 体育会運動部	125	45.6%	32.8%	21.6%	「所属していない」 群とのみ有意差あり	
スポーツサークル	169	49.1%	30.8%	20.1%		
文化会・文化サークル	229	48.9%	34.5%	16.6%		
所属していない	377	20.2%	37.9%	41.9%		
女性 体育会運動部	80	43.8%	33.8%	22.5%	「所属していない」 群とのみ有意差あり	
スポーツサークル	113	41.6%	38.9%	19.5%		
文化会・文化サークル	219	27.4%	42.5%	30.1%		
所属していない	426	13.8%	34.5%	51.6%		

比較すると、有意差は認められなかった(表2)。

大学時代に参加していた課外活動の区別に示すと表2の通りであった。「歌える」と回答した卒業生は、男性では「体育会運動部」と「スポーツサークル」「文化会・文化サークル」に参加していた場合は45.6%~49.1%であったが、「クラブ・サークルには所属していない」の場合には20.2%であった。何らかの課外活動に参加していた卒業生の方が何も参加していない卒業生よりも校歌・応援歌を歌える。そして、これら3グループと「所属していない」グループには有意差($p<.001$)が認められた(表2)。

女性の場合は、「歌える」と回答した卒業生は「体育会運動部」が43.8%、「スポーツサークル」が41.6%、「文化会・文化サークル」が27.4%、「クラブ・サークルには所属していない」が13.8%であった。「クラブ・サークルには所属していない」群が低いのは男性と同じであるが、「文化会・文化サークル」群は男性とは異なり低い。「体育会運動部」+「スポーツサークル」群と「文化会・文化サークル」群、「クラブ・サークルには所属していない」群の3群の間にはそれぞれ有意差($p<.001$)が認められ

た。

校歌・応援歌などに関する自由記述は以下に示す3件であった。校歌・応援歌についての具体的状況が示されている。

- ・応援団から学歌を振り付きで習った。この経験があるから、同じ大学の出身者とはこの学歌と一緒に歌ったりできるのでとても繋がりが強く感じられる。(女性、30歳)
- ・在学中は六大学野球が盛んで円陣を組んで校歌を歌ったり応援をしたりして楽しかった。(女性、56歳)
- ・当時も今も出身大学の校歌も全く覚えていない。(女性、68歳)

3.3 出身大学・短大の運動部の試合の応援経験

出身大学・短大の運動部の試合の応援経験についての結果は、男性では、「現役の際に応援に行ったことがある」が19.3%、「卒業してから応援に行ったことがある」が4.8%、「現役の際も卒業してからも応援に行ったことがある」が6.8%、「現役の際も卒業してからも応援に行ったことはない」が56.1%、「おぼえていない」が13.0%であった。大別すると「応援経験あり」

が約3割で「応援経験なし」が約6割、「おぼえていない」が約1割であった。卒業年別の結果を図2に示す。1970年卒～1989年卒の昭和期卒群と1990年卒～2014年卒の平成期卒群で比較すると、昭和期卒群の方が「応援経験あり」が多く、有意差 ($p<.001$) が認められた (表3)。

出身大学 (短大) の運動部の試合の応援経験についての女性の結果は、「現役の際に応援に行ったことがある」が11.9%、「卒業してから応援に行ったことがある」が3.2%、「現役の際も卒業してからも応援に行ったことがある」が2.1%、「現役の際も卒業してからも応援に行ったことはない」が70.4%、「おぼえていない」が12.4%であった。大別すると「応援経験あり」

が約2割で「応援経験なし」が約7割、「おぼえていない」が約1割であった。男性と比較すると、男性の方が「応援経験あり」が多く、有意差 ($p<.001$) が認められた (表3)。卒業年別の結果を図2に示す。1970年卒～1989年卒の昭和期卒群と1990年卒～2014年卒の平成期卒群で比較すると、有意差が認められなかった (表3)。

大学時代に参加していた課外活動の区分別に示すと表3の通りであった。現役時代と卒業後を問わず「応援に行った」と回答した卒業生は、男性では「体育会運動部」が64.8%で、「スポーツサークル」が54.3%「文化会・文化サークル」が41.8%であったが、「クラブ・サークルには所属していない」は18.1%であった。何らか

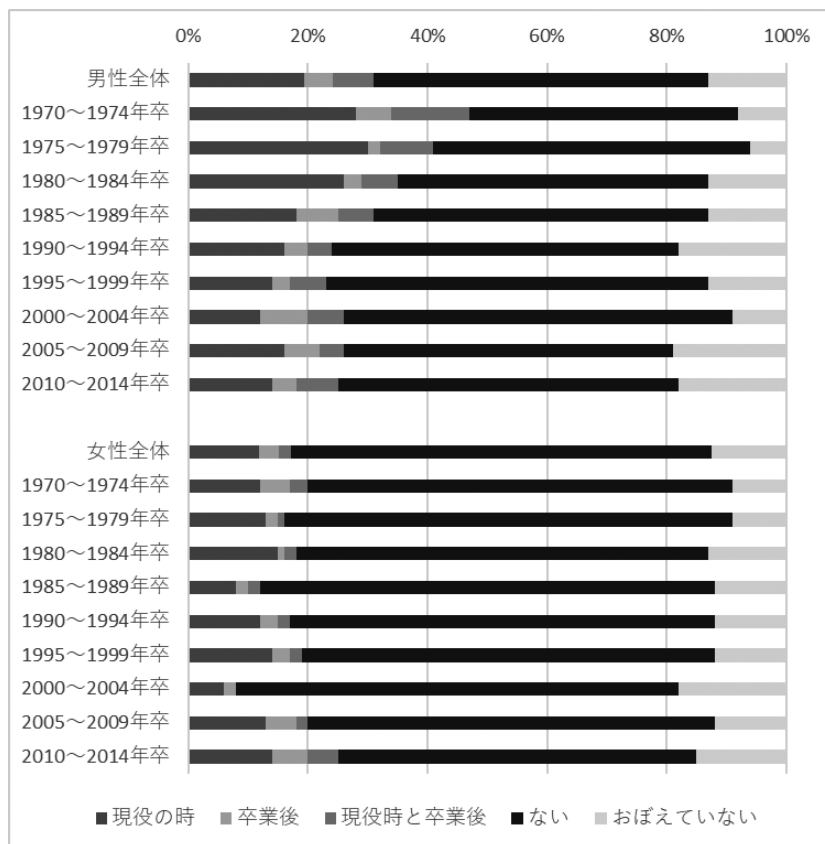


図2 運動部の応援の経験

表3 運動部の応援の経験

		人数	行った	行ったことはない	χ^2 乗値	p値	
男性		783	35.5%	64.5%	49.32	0.000	
女性		788	19.7%	80.3%			
男性	昭和期 ('70~'89年卒)	360	42.8%	57.2%	15.39	0.000	
	平成期 ('90~'14年卒)	423	29.3%	70.7%			
女性	昭和期 ('70~'89年卒)	357	18.5%	81.5%	0.58	0.447	
	平成期 ('90~'14年卒)	431	20.6%	79.4%			
男性	体育会運動部	122	64.8%	35.2%	「所属していない」 群とのみ有意差あり		
	スポーツサークル	162	54.3%	45.7%			
	文化会・文化サークル	220	41.8%	58.2%			
	所属していない	321	18.1%	81.9%			他の3群と有意差あり
女性	体育会運動部	74	71.6%	28.4%	他の3群と有意差あり		
	スポーツサークル	112	48.2%	51.8%			他の3群と有意差あり
	文化会・文化サークル	211	17.5%	82.5%			他の3群と有意差あり
	所属していない	396	6.8%	93.2%			他の3群と有意差あり

の課外活動に参加していた卒業生の方が何も参加していない卒業生よりも応援に行った経験があった。そして、これら3グループと「所属していない」グループにはそれぞれ有意差 ($p<.001$) が認められた。

女性の場合は、「応援に行った」と回答した卒業生は「体育会運動部」が71.6%と高く、次いで「スポーツサークル」が48.2%、「文化会・文化サークル」が17.5%、「クラブ・サークルには所属していない」が6.8%であった。これら4群の間にはそれぞれ有意差 ($p<.001$) が認められた。

出身大学の運動部の応援経験に関する自由記述は32件であった。応援経験の有無について代表的なものを以下に示す。

- ・野球部やアメリカンフットボール部やラグビー部が強かったので、現役時代も卒業後も応援に行った。(男性、46歳)
- ・大学時代にヨットに乗っていたので、現役の活躍を応援しに行く事もあり、年1回のOBレースにも参加している。(男性、51歳)
- ・駅伝に出る大学なので、応援に行ったりする。スポーツライフを豊かにしている。友達との

交流も増えた。(女性、31歳)

- ・在学中は六大学野球が盛んで円陣を組んで校歌を歌ったり応援をしたりして楽しかった。今の人生を豊かにしている。(女性、56歳)
- ・運動は盛んでなかった学校で、特に女性ばかりの学校でしたのでスポーツの応援に行くこともありませんでした。(女性、65歳)

3. 4 出身大学・短大の運動部の活躍への期待

出身大学・短大の運動部の活躍への期待についての結果は、男性では、「期待している」が50.6%で、「期待していない」が49.4%であった。卒業年別の結果を図3に示す。1970年卒～1989年卒の昭和期卒群と1990年卒～2014年卒の平成期卒群で比較すると有意差は認められなかった(表4)。

女性では、運動部の活躍に「期待している」が32.4%で、「期待していない」が67.6%であった。男性より「期待している」が少なく、有意差 ($p<.001$) が認められた(表4)。なお、大卒者(526人)では「期待している」が40.7%であった。スポーツ活動が盛んな大学の方が期

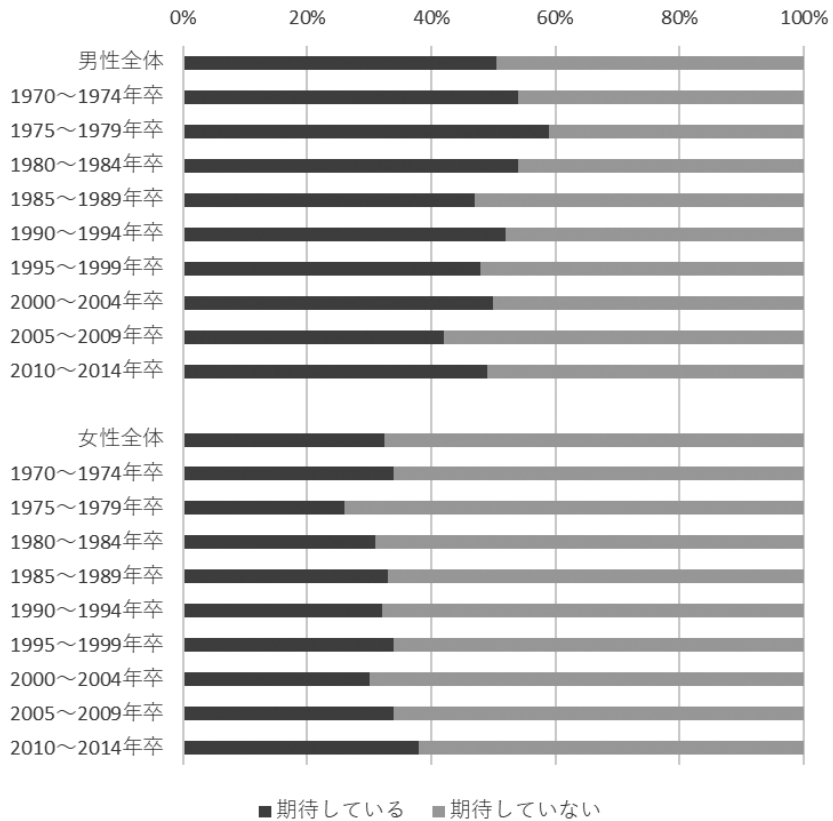


図3 運動部の活躍への期待

期待が高いのは当然であろう。卒業年別の結果を図3に示す。1970年卒～1989年卒の昭和期卒群と1990年卒～2014年卒の平成期卒群では有意差が認められなかった(表4)。

大学時代に参加していた課外活動の区別に示すと表4の通りであった。現役時代と卒業後を問わず「期待している」と回答した卒業生は、男性では「体育会運動部」が69.5%で、「スポーツサークル」が62.9%「文化会・文化サークル」が61.9%であったが、「クラブ・サークルには所属していない」は36.3%であった。何らかの課外活動に参加していた卒業生の方が何も参加していない卒業生よりも運動部の活躍に期待している。そして、これら3群と「所属してい

ない」グループにはそれぞれ有意差 ($p < .001$) が認められた。

女性の場合は、「期待している」と回答した卒業生は「体育会運動部」が61.0%で、「スポーツサークル」が63.0%、「文化会・文化サークル」が37.2%、「クラブ・サークルには所属していない」が20.0%であった。「文化会・文化サークル」と「クラブ・サークルには所属していない」は他の群との間に有意差 ($p < .001$) が認められた。

出身大学の運動部の活躍に期待する自由記述は8件であった。各年代の回答を以下に示す。

- ・出身大学は六大学野球(在学中3度優勝)、卒業近くには関東大学ラグビーと応援に行

表4 運動部の活躍への期待

		人数	期待している	期待していない	χ^2 乗値	p値
男性		900	50.6%	49.4%	60.80	0.000
女性		900	32.4%	67.6%		
男性	昭和期 ('70~'89年卒)	400	53.5%	46.5%	2.50	0.114
	平成期 ('90~'14年卒)	500	48.2%	51.8%		
女性	昭和期 ('70~'89年卒)	400	31.0%	69.0%	0.69	0.408
	平成期 ('90~'14年卒)	500	33.6%	66.4%		
男性	体育会運動部	131	69.5%	30.5%	「所属していない」 群とのみ有意差あり	
	スポーツサークル	178	62.9%	37.1%		
	文化会・文化サークル	236	61.9%	38.1%		
	所属していない	397	36.3%	63.7%		
女性	体育会運動部	82	61.0%	39.0%	この2群間には有意差 なし	
	スポーツサークル	119	63.0%	37.0%		
	文化会・文化サークル	234	37.2%	62.8%		
	所属していない	475	20.0%	80.0%		

くスポーツが多く、未だにクラスの友人、ゼミの仲間と応援しています。近年は箱根駅伝にも出走して、応援種目が増えています。(男性、64歳)

- ・駅伝などテレビで活躍している姿を見ると応援したくなり、なんだかうれしくなるし、誇りに思う。これからもどんどんいろいろな競技で活躍することを期待している。(男性、56歳)
- ・出身大学をとうしてスポーツに対して視野が広がった。テレビを通じてではあるが母校を応援する喜びが最近とても楽しい。(男性、47歳)
- ・出身大学が出ている競技は応援するようにしている。(男性、32歳)
- ・同級生同士はもちろん、先生とのつながり、先輩後輩とのつながりが卒業後もずっと続いていたり、母校の活躍を現地やテレビで応援できることを嬉しく、誇らしく思う。(女性、48歳)
- ・大学が好きになったので、どんどん応援したくなっちゃったと思った。毎日が楽しい。もっとみんなにスポーツをしてもらいたい。(女

性、29歳)

4. 考察

4.1 卒業年代の特徴

卒業年代の特徴は、出身大学・短大の校歌や応援歌について、昭和期卒群(1970年卒～1989年卒)の方が平成期卒群(1990年卒～2014年卒)より「歌える」比率が有意に高かった(表2)。私立大学116校の校歌について調べた小林によれば、どの年代に設立した大学も校歌を有していた(小林, 2020)。しかし、応援歌については、昭和時代までに設立した大学では84%(68/81校)が応援歌を有しているのに対し、平成時代に設立した大学では40.9%(9/22校)に過ぎなかった(小林, 2019)。本調査では回答者の出身大学の情報は得ていないので推測に過ぎないが、平成期卒の卒業生には一定数の平成時代設立大学卒業生も含まれているので、応援歌の有無がこのような結果になったと思われる。

自由記述からは在学中の経験が大学によりまちまちであることがうかがわれた。「応援団から学歌を振り付きで習った。・・同じ大学の出

身者とはこの学歌を一緒に歌ったりできる・」(女性、30歳)や「在学中は六大学野球が盛んで円陣を組んで校歌を歌ったり応援をしたりして楽しかった。」(女性、56歳)というように校歌・応援歌に関する経験についての回答がある一方、「当時も今も出身大学の校歌も全く覚えていない。」(女性、68歳)という回答もあった。大規模伝統校と女子大学・短大や美術大学などでは運動部活動の活発さが異なる。したがって、卒業大学の属性を考慮して調査を行う必要性がある。

応援経験についても昭和期卒群の方が平成期卒群よりも有意に多かった(表3)。この結果も大学属性との関係がうかがわれる。自由記述回答では、「野球部やアメリカンフットボール部やラグビー部が強かったので、現役時代も卒業後も応援に行った。」(男性、46歳)や「駅伝に出る大学なので、応援に行ったりする。」(女性、31歳)、「在学中は六大学野球が盛んで円陣を組んで校歌を歌ったり応援をしたりして楽しかった。」(女性、56歳)などの回答がある一方、「運動は盛んでなかった学校で、特に女性ばかりの学校でしたのでスポーツの応援に行くこともありませんでした。」(女性、65歳)という回答もあった。伝統校の方が大学の規模も大きくスポーツも盛んなのでこのような結果が得られたのだと推察される。

なお、出身大学・短大の運動部の活躍への期待については、卒業年代による有意差は見られなかった。どの年代も期待度は一様であった。

4.2 参加した課外活動別の特徴

在学中の課外活動については、「クラブ・サークルには所属していない」と回答した卒業生が、他の回答、すなわち「体育会運動部」「スポーツサークル」「文化会・文化サークル」所属よりも「校歌・応援歌を歌える」「応援した経験がある」「活躍を期待している」のどの項目でも有意に低かった。本研究ではその要因までは推察できないが、中高時代からのスポーツの経

験(応援含む)や愛校心(同窓会活動や寄付)などの要因を仮定して詳しく調査する必要がある。

5. おわりに

本研究では、大学・短大を1970年から2014年に卒業した人を対象としてアンケート調査を行い、男女900人ずつ、合計1,800人から回答を得た。回答を分析した結果、以下に示す結果が得られた。

1. 母校の校歌や応援歌を「歌える」と回答した卒業生は、男性は32.4%、女性は21.8%であり、有意差が認められた。
2. 在学中か卒業後に母校の運動部の応援をした経験のある卒業生は、男性は30.9%、女性は17.2%であり、有意差が認められた。
3. 母校の運動部の活躍を期待している卒業生は、男性が50.6%、女性が32.4%であり、有意差が認められた。
4. 上記3項目のいずれの回答率も課外活動に参加していた卒業生の方が、何も参加していない卒業生よりも高かった。

以上の結果から、母校の運動部の応援や活躍への期待度には、在学中の課外活動経験と性別、卒業年代が関係していることが示唆された。しかし、その影響の大きさや因果関係、その他の要因については、本研究では解明できなかった。大学スポーツだけではなく、中高時代からのスポーツ経験や同窓会活動、寄付の経験などとの関係も調査する必要がある、今後の課題とした。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP16K01079 および2018年度文教大学学長調整金の助成を受けて行った。

参考文献

江原昭博(2011), 第4章 アメリカの大学に

- における卒業生の研究再考－ Alumni Studies の歴史的変遷と IR の関係－，高等教育における IR (Institutional Research) の役割，私学高等教育研究所。
- 一柳慎太郎 (2015)，スポーツ応援による大学構成員の帰属意識醸成とエンロールマネジメントへの展望，次世代リーダー養成ゼミナールプロジェクト実践ジャーナル，4，123-131.
- 小林勝法 (2015)，教養体育の効果を測る卒業時調査の方法論的検討，文教大学国際学部紀要 25 巻 2 号，31-44.
- 小林勝法 (2019)，私立大学の応援歌の時代的特徴，大学体育，114，26-29.
- 小林勝法 (2020)，私立大学校歌の時代的特徴，文教大学「言語と文化」，32，93-111.
- 文部科学省 (2020)，学校基本調査，https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm，2020.9.30 参照
- スポーツ庁 (2020)，令和元年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」。
- 読売新聞 (1906)，早稲田大学対慶応義塾の第 1 回野球試合 早大グラウンド、2 対 1 で慶応の勝利，1906 年 10 月 29 日付け。
- 読売新聞 (2020)，早稲田 11 季ぶり V 16 度目／ラグビー，2020 年 1 月 12 日付け。
- 全国大学体育連合 (2018)，大学スポーツ推進に関する学生の意識調査報告書。